

未来に伝えたい

白い森おぐにの

文化遺産

その2 「雨乞い法印」 伝説

雄大な飯豊の山なみが目の前に迫る長者原集落。その背後には、尖った姿をした三角山がそびえています。今回は、ここにまつわる「雨乞（こ）い法印」の伝説について紹介します。

かつて東北地方には、里で暮らしながら村人たちに加持祈禱をおこなう修験系の宗教者がいて、「法印様」（あるいは「法印さん」）などと呼ばれていまし



▲三角山（左端）と長者原集落（中央）

た。この伝説に登場する秀状という法印もその一人です。

その昔、片貝の白雲山不動院にとっても素晴らしい法力をもつ法印がいました。その二男として生まれた秀状は、21歳のときに長者原へ分家に出されます。しかし、それまで遊んでばかりで法術をきちんと学ばなかったため、最初は歓迎してくれた村人たちもそのうち相手にしてくれなくなりました。そこから一念発起した秀状。飯豊の深山で幾年にも及ぶ厳しい修行を積み、ついには、念ずればたいいていのことが叶うほどの法力を身につけました。

そんなある年の夏、長者原では1ヶ月以上も全く雨が降らない日が続きました。困り果てた村人たちは、法力で雨を呼ぶよう連日、秀状のところへ頼みに

来ました。そこで秀状は三角山へ登り、雨乞いをおこなうことにしたのです。

山頂に祭壇を設け、喉から血がでるほど必死で呪文を唱えること丸3日。4日目にしてようやく雨雲を招き、雨を降らすことができました。

また、このとき天から落ちてきたという2匹の龍を秀状はたらいに入れました。そしてその後は、三角山に登ってこれに法術をかけることで自在に雨を降らすことができるようになったそうです。

以上が『自然と文化 こたまがわ』（小玉川小中学校・小玉川自然教育圏整備促進協議会編集発行、1982年）に掲載されている伝説のあらましであり、三角山はこれにちなみ「雨乞い山」とも呼ばれます。また、長者原地内の内川橋近くにはこの秀状の墓とされる円形の塚が残っています。『小国の文化財』（小国町誌編集委員会編、1999年）によると、その土盛りの頂部にある石塔には「権大僧都永秀帰元 俗名 秀状」



▲長者原にある法印塚

と、その名が刻まれています。さらに、その裏面には「延宝二甲寅年六月五日」と、この塚が造られたであろう年月日も記されています。延宝2年は江戸時代前期頃であり、西暦で言うところの1674年にあたります。その頃に長者原で活躍した秀状法印。その法力のすごさに人びとは畏怖し、後の世へ伝えるべく、伝説として語り継いできたのではないのでしょうか。

このように各地に遺されている伝説や地名に関するいわれ。それらは、秘められた地域の歴史へと私たちの想像をいざなぎ、その場所への興味や愛着を沸き立たせてくれる先人たちの贈り物なのです。

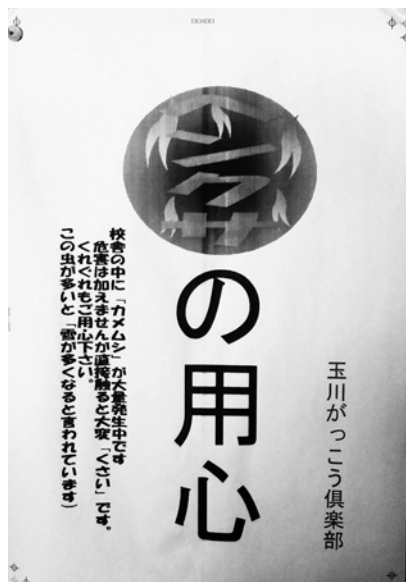
（教育委員会生涯学習室）

series 82

「日常に目を凝らして」

地域おこし協力隊

かけはた 欠端 あやの 彩乃



小国町での冬は不安からはじまったものの一瞬で驚きに変わりました。東北地方で育ちながらも雪には耐性のない私は、きれいにそびえたつ雪の壁に、ガタガタではない道路、その除雪技術に驚かされ、別格の雪国を体感しています。

先月、玉川小中学校から学校資料を収集してきた際、校舎内のある張り紙を目にしました。「ヘンクサの用心」という火の用心を真似た張り紙でした。地元のかたは知っているであろうカメムシの知識を取り上げていたユニークさや、小国ならではの注意書きに思わず写真を撮ってしまいました（笑）。

何度も訪れていたはずなのに今まで見落としていた出来事。小国町での生活に慣れてきたころ、日常に潜むちょっとした発見を逃さないようにしていきたいと改めて感じた日でした。

「協力隊任期残り1年 さらに頑張ります」

地域おこし協力隊 なかはら 中原 りょう 凌

東部地区での雪国生活も2年目になりました。

昨年は大雪が降り、除雪に苦労していましたが、昨年の反省点を踏まえ、今年の除雪はスムーズにできています。それでも大雪が降った日には朝夕と除雪をしなければ自宅の中に入れず、雪国の生活に慣れるには、まだ時間がかかりそうです。除雪のことで言えば、先日、近所のかたに年末年始に帰省することを伝えたら、帰省している間は除雪を心配しないようにと近所のかたがたが除雪の手伝いに来てくれました。

お陰様で年末年始は千葉の実家でゆっくり過ごすことが出来ました。本当にありがとうございます。

昨年も新型コロナの影響で活動面で上手くいかないこともありましたが、地域のかたがたの支えがあり挫けず、前に進むことが出来ました。

協力隊としての任期も残り1年、この1年は恩返しも含めた活動にしていきたいです。

